

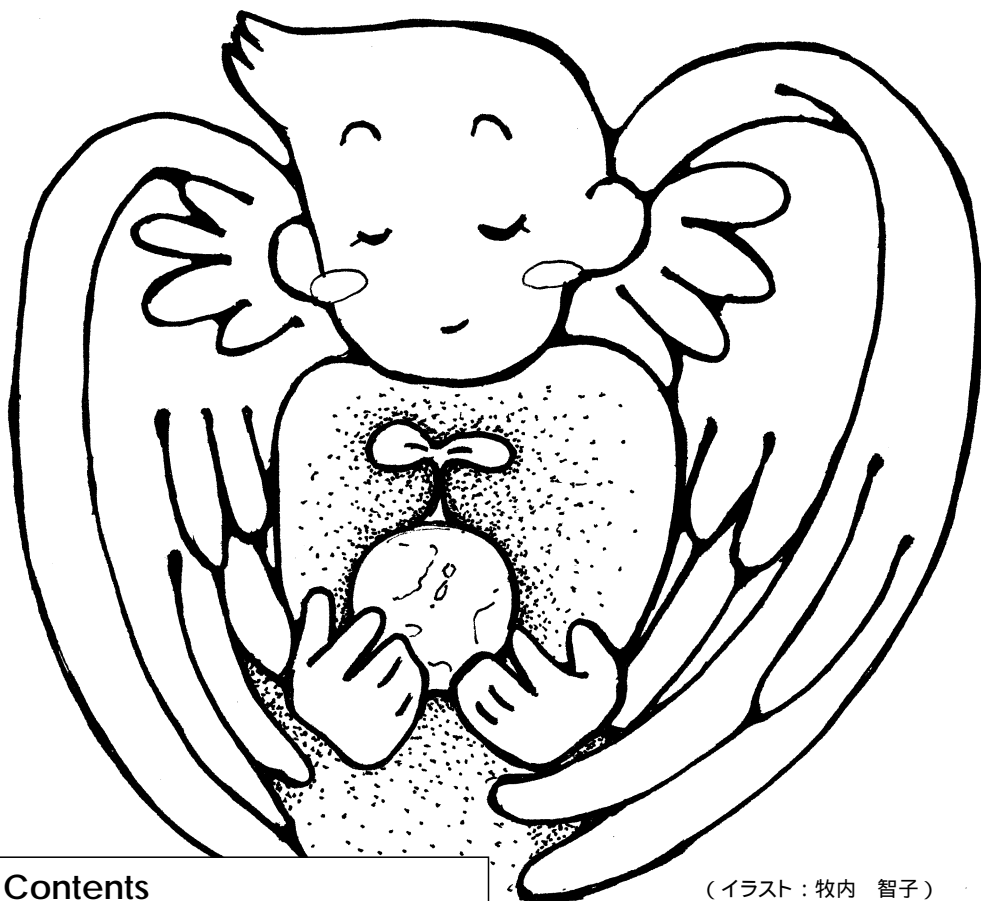
インクル

第5号

財団法人 共用品推進機構

〒101-0064
東京都千代田区猿樂町
2-5-4 OGAビル 8階

"Incl." by The Kyoyo-Hin Foundation



(イラスト：牧内 智子)

目次 / Contents

- ・特集・ビデオ版『みんなで跳んだ』
学校、地域、企業、そして家庭で大反響! 2
- みんなで見た、みんなで泣いた、みんなで考えた 視聴者からの手紙 4
- ・初めての弱視者の不便さ調査
見やすさのカギは「大きさ」「表示位置」「照明」(杉山雅章) 6
- ・共用品推進機構ニュース(法人会員報告会を開催) 9
- ・松井智さんを悼む
いつも、みんなのために「居場所作り」をしてくれた(星川安之) 10
- 先生が残された花火を、天高く、打ち上げていきます(松森果林) 11
- ・寄稿・今すぐできる「FD版書籍」の作り方(上) 作成方法(屋田悟郎) 12
- ・ニュース&トピックス(大活字、テルモ) 14
- ・キーワードで考える共用品講座
第5講：共用品の類型(後藤芳一) 15
- ・『インクル』からのお願い 16

特集 ビデオ版『みんなで跳んだ』

学校、地域、企業、そして家庭で大反響!

(財)共用品推進機構が^{かおう}花王(株)情報作成センターと共同で企画・制作した上映時間5分間のビデオ『みんなで跳んだ』が今、全国の教育現場や地域社会、企業、そして各家庭で、静かなブームを巻き起こしている。1月に朝日新聞に掲載された記事を読んだ読者からの貸し出し依頼は900件を超え、熱い感想も続々と届いている。ちょっとした社会現象になってきた感さえある。
(高嶋 健夫)

を紹介したものだ。ビデオ化は、昨年11月に東京・銀座ソニービルで開催した「共用品が開く未来展」で上映、共用品・共用サービスを支える「心のバリアフリー」を訴えようとの目的で企画された。

同展では4日間の会期中、休みなくリピート上映したが、来場者に好評を博し、貸し出し希望も相次いだ。そして、今年1月8日に朝日新聞夕刊社会面に大きく紹介されたことがきっかけで、一気にブームに火がついた。花王広報センターの全面協力を得て、一般の希望者に対して返却時の送料負担だけで貸し出しを行うことを同記事中に紹介してもらったところ、掲載翌日には早くも300件近い貸し出し依頼がファクスで寄せられた。

小中学校はじめ教育現場での上映希望がやはり多いが、研修用など企業からの要請も目立ち、中には

「心のバリアフリー」を訴えたい

『みんなで跳んだ』は、97年11月に朝日新聞夕刊に掲載された「変換キー」というコラム記事が原作。^{かながわ おだわら}神奈川県小田原市のある中学校で、運動会のクラス対抗大縄跳びをめぐるって実際にあった「小さな物語」



The Story

9月21日晴れ.....運動会前日

「大縄跳びで、彼を外すのはいやなんです」。ある中学校の運動会の前日。先生にクラスの一人が言ってきた。

長さ二十メートルほどの縄をクラス全員で跳び、合計回数を競う。でも、ぼくだけが跳べない。一人で、次に二人で練習した。みんなから声もかけてもらった。なお引かかった。

一緒に跳ぶのが平等なのか。外すのが思いやりなのか。先生は迷いながら、彼を声かけ役にしていた。

みんなで放課後に話し合った。一人ずつ意見を言う。三十六人中「勝てなくなるから入れない」が十三人、「チームワークが大切だから一緒に」が十一人。

後半にだけ入れる折衷案が出た。「こころで落ち着くか」と思った先生は採決した。

ところが、「反対」が二十三人。「彼には全部でないよりつらい」「みんながバラバラになってくのはイヤ」さらに「跳びたくないの」って彼に聞いた。

「ぼくは跳びたい」

ぱちぱちと拍手が起きた。別の子が立つ。「勝ち負けなんて」。拍手が大きくなる。

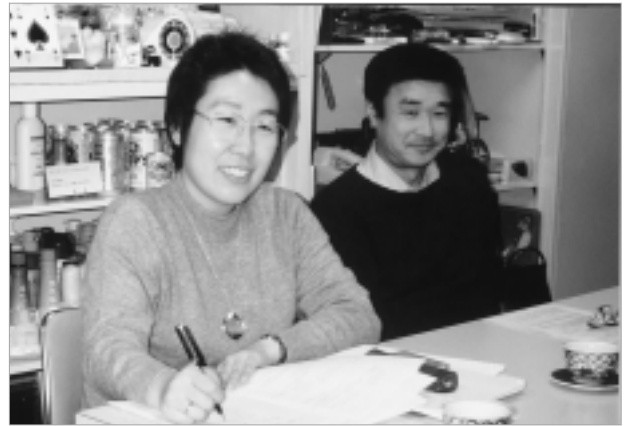
「本音が。それでいいのか」。先生は涙声になってい

「職場がすぐ近くなので来てしまった。今ここで見せてほしい」と、事務局に押し掛けてきた中高年の企業幹部もいたほど。ビデオ化の発案者である星川安之・共用品推進機構専務理事・事務局長も「反響の大きさと広がり、こちらの予想をはるかに上回る」と、うれしい悲鳴を上げている。

ビデオを見た感想もすでに300通以上届いている。そのごく一部を4～5ページで紹介したが、感動したことを記したり、好意的に評価したりするものが大半を占めている。

何人もの生みの親たち

ビデオ『みんなで跳んだ』には、何人もの生みの親がいる。原作の記事を書いた朝日新聞東京本社社会部の氏岡真弓記者、ビデオ化を発案した星川事務局長、実際に制作にあたった渡辺知基チームリーダーはじめ花王情報作成センターのスタッフ、そして誰よりも、物語の舞台である小田原市立城北中学校で教えていた柏木修先生(現在は同市立驒宮中学校)と、主人公である当時の城北中の生徒たち、つまり



生みの親の氏岡真弓さん(左)、柏木修さん(撮影:高嶋健夫)

柏木先生の教え子たち。

柏木先生は「知り合いの教員からビデオを貸してほしいとか、記事のコピーを送ってほしいとか頼まれるなど、反響がずっと続いています」と、反響の大きさに驚きながらも、『みんなで跳んだ』が提起するいろいろなテーマを、1人でも多くの人たちに考えてほしいと、機会あるごとに訴え続けている。

問い合わせ・ビデオの貸し出し依頼先:

(財)共用品推進機構

(TEL03-5280-0020、FAX 03-5280-2373)



た。全員が「みんなで跳びたい」に手をあげた。

9月22日雨.....順延

.....あのと「跳びたい」と言ってくれて、ホッとしました。もし「跳びたくない」といっていたら、こんな会議なんかできなかったと思うし.....。

みんなの泣き顔、まだ頭の中から離れない。あっ、そうそう、先生の泣き顔、おかしかったな。先生、必死になって泣くのをやめようとして。あーゆー時は泣いていいのに。

9月23日晴れ.....運動会当日

本番では、五クラス中のピリだった。それでも、彼

は初めて続けて跳べた。友達と手をつないで、次は一人で、全部で七十一回跳んだ。

彼は後で作文に書いた。

「今日のぼくは絶好調でした。大縄では絶好調でした。ぼくには自信がありました。とびはねるほどうれしいです」

心配でみんなの足元ばかり見ていた先生が、ほかの生徒の作文で知ったことがある。

「みんな、跳びながら泣いていました」

写真提供:花王情報作成センター

みんなで見た、みんなで泣いた、みんなで考えた 視聴者からの手紙

(財)共用品推進機構には、ビデオ『みんなで跳んだ』の貸し出しを希望し、実際に視聴された方々からの反響が続々と寄せられている。それらの大半はビデオの内容・質の高さや、制作した共用品推進機構や花王の活動理念、企業経営姿勢を評価するものとなっている。ここでは、ほんの一部をご紹介します。

学校で

「思いやり」とは? 「平等」とは?

小学生も、大学生も、先生も、一緒に考えた

道徳の授業で6年生30人に見せました。短い中にとってもよくまとまっていて、子供たちも集中して見ていました。(東京都港区・小学教員・女性)

受験で点数至上主義の中にいる高3の生徒たちに、本当に大切な物は何か考えてもらいたかったので、見せました。(静岡市・高校教員・女性)

6年生の道徳の授業に活用させていただきました。「思いやり」とは何か、「平等」の目指す意義とは、そんな葛藤が生じたり、徳目と現実のずれを鋭く刺激する内容で、話し合う題材としてよい教材でした。岸田今日子さんの語りもとてもよかったです。

(東京都杉並区・小学教員・男性)

3年生の各教室で一斉放送で見た(男子74人、女子65人)。ほとんどの生徒が感動していました。ビデオを見た後、感想文を書かせたのですが、15~20分間、一生懸命、自分の感じたことを書いていました。(東京都新宿区・中学教員・男性)

この人たちの半分は最初、勝ち負けを考えていたけれど、跳べなかった彼の言葉で勝ち負けを考えるのをやめた。……短いけれど、クラスのあたたかさやチームワークを考えさせてくれる作品でした。

(「心の健康」をテーマにした保健の授業で見た小学校6年生・男子)

「勝つためなら1人くらい減ったって!」とっている人! それは、ちょー危険思想だ。ちょっと自分ができるからって、思い上がるな!…… (同)

勝ち負けよりも、クラスがまとまることを選んでるので、このクラスには思いやりのある人が多いんだなと感じました。クラスで協力することが一番大切なことだと思いました。

(静岡県・中学3年生・女子)

小学校4年生の授業で見せました。素晴らしい企画で、心から拍手を送りたいと思います。2002年度からの「総合的な学習」に向けて、ぜひ、それに関連した企画をお願いできたら、と思います。

(千葉県船橋市・小学教員・男性)

私が「放送論」を教えている3年生25人に期末試験で見せ、「このビデオを見て所感を述べよ」と出題。「感動した」「自分の子供の頃を思い出した」など、全員がこのビデオの意図するところをきちんと理解し、共感していたようだ。

(横浜市・大学教員・男性)

大学の保健体育の時間にスポーツに対する考え方、意識を考え直すための教材として教室で学生に見せた。一様に感動し、勝つことだけがスポーツ、運動の価値、意義ではないことを共感したようだった。(東京都世田谷区・大学助教授・男性)

幼稚園児の保護者の方、約50人と拝見。……自分が果たしていい人生を生きているのか、そんな質問を突きつけられたような気がします……。

(埼玉県幸手市・主婦・保護者会会長)

市の「青年芸術劇場」という催しのスタッフに応募した中高生18人と見た。感想はあえて聞かなかった。それで十分と思ったので。(津市・主婦)

1~6年生、全24クラスで見た。とても感動しました。どの教室でも担任が最初に泣いていました。

(横浜市・小学教員・女性)

家庭で

「癒し」と「やさしさ」

家族全員で、自分1人で、考えた

このクラスの子供たちは皆、貴重な経験をしたと

思う。今後の人生において何が大切なことなのか、知ることができたとし、同じ中学生の親として、うらやましくさえ思います。

(中2の長男、中1の長女と一緒に見た埼玉県入間市の主婦)

幼稚園のお子さんがあるご近所のお母さんは、忘れていた懐かしい教室、学校の用具を思い出し、もうすぐ自分の娘もそんな場所で生活していくのかと感激していた。私自身は3日続けて見たけれども、涙が出てきました。(埼玉県戸田市・主婦)

私(59歳)、妻(57歳)、長女(31歳)、次女(25歳)の家族4人で見た。映像がとても美しく、kiroroの歌にマッチしていた。(横浜市・会社員・男性)

2人の子供(小5男子、小4女子)と一緒に見た。子供も感動していたが、涙を流す親を「へえー」という感じで、親が考えている以上にシビアな子供にびっくり。これからも「心のバリアフリー」、心を育てるビデオ作りをお願いします。

(東京都杉並区・主婦)

自宅で1人で見た。短すぎると思ったが、「とびはねるほどうれしい」「みんな跳びながら泣いていました」という言葉には感動した。

(東京都文京区・大学生・男性)

休日に家族4人で見た。物があふれていても、心を豊かにしてくれる物は少ないと思います。これからも地道な活動を続けてください。

(千葉県船橋市・主婦)

小1の娘が「もう1回みたい」と何度もみていました。「自分だったらどうするかな……」と考えていたようでした。私も久しぶりに感動しました。

(横浜市・主婦)

会社から帰宅して、1人で見た。感動した。涙が止まりませんでした。障害のある人がない人に与える「癒し」と、障害のない人がある人に向ける「やさしさ」を思いました。そういう人間の素晴らしい可能性を、ずっと忘れないでいたいです。

(東京都保谷市・会社員・女性)

家族7人(祖父母、父母、高1、中1、小5)で見ました。高1の娘は見終わって黙って席を外しました。日頃はテレ屋のせいもあり、「泣かせようとし

て作るドラマには腹が立つから見ない」などと文句ばかりの家族も、素直に感動していたようです。

(東京都稲城市・主婦)

職場で

社会貢献、人権啓発、そして……
役員会で、営業会議で、社内で考えた

会社の会議室で、社長と各事業部長などリーダークラス約10人で見た。たった5分間のビデオだが、ぐっと心に迫るものがある。花王さん、素晴らしい社会貢献活動をされていますね。

(川崎市・会社員・男性)

字幕を付けていただいたことに感心いたしました。(「手話ニュース」番組ディレクター・女性)

販売会議で、営業マン全員に見せました。全員、感動していました。(東京都立川市・会社員・男性)

会社で同じ部のメンバーと見た。とかく、いじめが多い今日この頃、こういう形で仲間に対する思いやりが持てることに勇気づけられた。

(東京都世田谷区・会社員・男性)

上司に勧められて、仕事の合間に会議室で1人こっそり見た。とても感動した。映画で言えば「ニューシネマパラダイス」のラストシーンみたいで……。1人でよかった。みんなの前で泣き顔は見せられないので。(神奈川県藤沢市・会社員・男性)

人権啓発室のスタッフ全員で拝見。「いじめ」のことばかり報じられている中で、このような清々しい世界もあるのだなあと本当に感激しました。今後の社内人権研修の中で広くこの内容を伝えてまいります。(東京都港区・会社員・男性)



初めての弱視者の不便さ調査

見やすさのキは「大きさ」「表示位置」「照明」

すぎやま まさあき
杉山 雅章 (個人賛助会員、(福)日本点字図書館用具事業課)

視覚障害者といえば、とかく全盲の人たちにスポットが当たってしまい、弱視の人たちが忘れられがちになっている。弱視者の正確な実数はわかっていないが、約17万人と推計され、視覚障害者全体(約30万人)の半数以上を占める。また、視力が弱いことにより不便さを感じている人は、高齢者まで含めれば1000万人ともいわれている。

(財)共用品推進機構・東京会議視覚情報障害班では、E&Cプロジェクト時代の1993年に「視覚障害者の朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査」を実施したが、この時は調査対象の約8割が全盲の人たちだったため、弱視の人たちの声を必ずしも十分に反映することができなかった。

そこで、今回は(財)日本児童教育振興財団と^{まつした}松下電器産業(株)の助成を得て、視覚障害者のうち弱視者を対象にして「見えにくいことにより生ずる不便さ」を調査した。

調査時期は98年12月～99年2月。回答者は268人。男性6割、女性4割で、20～60歳までが全体の約8割を占める。普段、^{すみじ}墨字(活字、手書きの文字など)を使う人が全体の約9割。新聞文字を目で読む人は、レンズ、拡大読書器を使う人も含めて全体の約7割。学生、主婦、就労者が全体の約8割と、社会で活躍し、墨字を読むことができる弱視の人たちが回答者の中心になっている。

不便なのは、駅の料金表示、 銀行のATM

質問は全部で24問。今回はその一部をご紹介します。まず、「見えにくくて不便を感じる表示は？」という質問をした。集計結果は図表1のように、「駅の運賃表」、「駅の時刻表」、「バスの料金表」と数字を読まなければならないものについての声が多い。次い

で、液晶表示やタッチ式画面が主流の銀行のCD/ATM(現金自動支払機・同預け払い機)、「トイレの男女別表示」が入っている。最近のトイレの表示は、形も色も男女の区別が識別しづらくなっているようである。文字ではなく、本来わかりやすいはずのピクトグラムがここにあげられているのは大きな問題といえる。

図表2は、それらの表示が不便な理由について集計した結果である。多種多様な声があげられたが、その中で特に多かったのは、字が小さい、表示位置が高い、背景とのコントラストが悪い、照明が暗く、表示が見えない、光線の加減で見にくいであった。

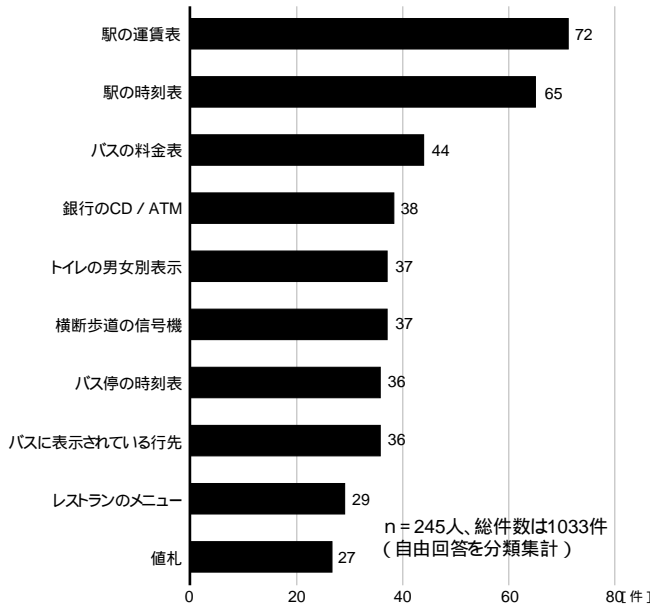
文字が小さいと、目を近づけてルーペを使わなければ見えない。ところが、表示位置が高ければ、目を近づけることができない。文字と背景とのコントラストが悪いと、せっかくの表示も見にくいものになってしまう。さらに周囲の照明が暗いと、文字は一層見えにくくなる。また、光線のあたり方によっても見えなくなることがある。このように、これらの5項目は見やすさを確保するうえで特に重要なポイントである。

買いやすいのは、 個人商店、スーパー、コンビニ店

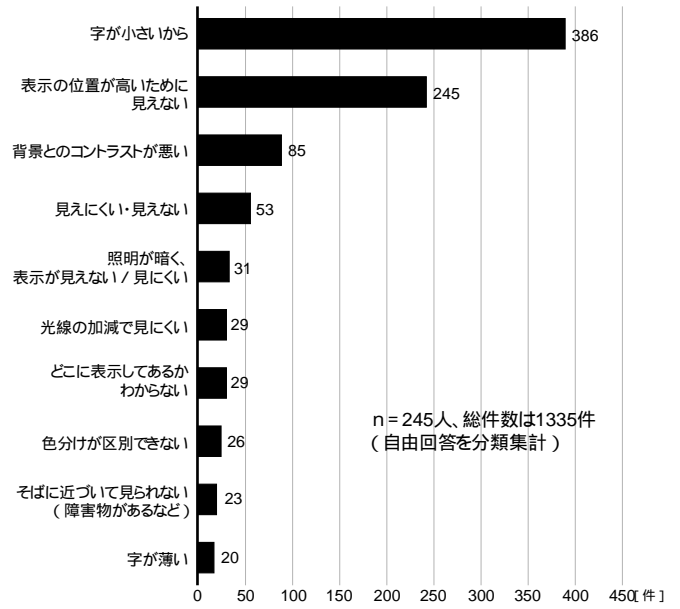
次に、買い物についての集計結果を紹介する。「もっとも買い物しやすいお店は？」という質問では、図表3のように、個人商店、スーパーマーケット、コンビニエンスストア、デパートと続いている。

図表4は便利なお店とその理由の関係を表している。個人商店はやはり「対面販売」が便利。スーパーは行くことに慣れてしまえば、商品を手にとって、自分のペースでゆっくりと品物が選べる。ここでは

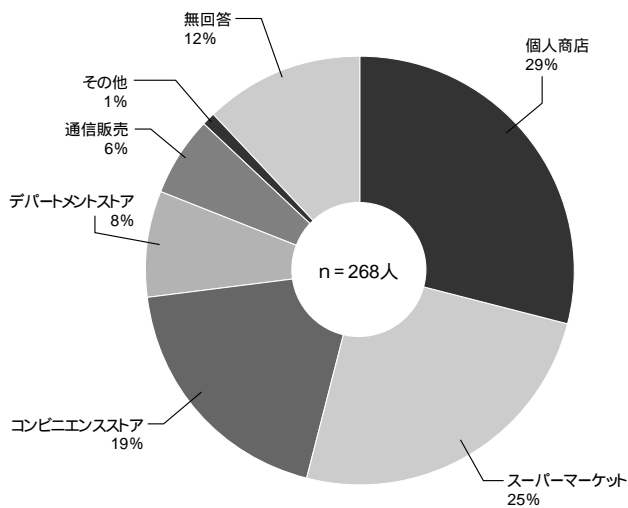
図表1 見えにくくて不便を感じる表示



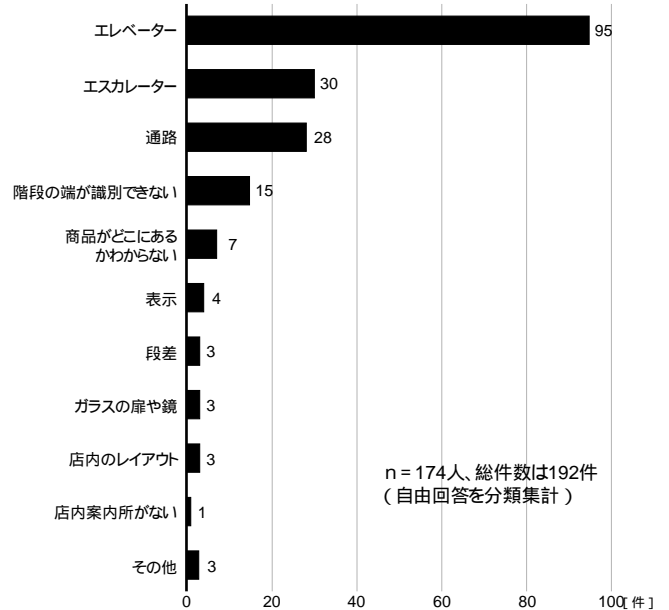
図表2 表示が不便な理由



図表3 もっとも買い物しやすいところ [選択回答]



図表5 店内を移動するとき不便に感じること、失敗したこと



図表4 便利なお店とその理由

便利なお店	対面販売だから	ゆつくり選べる自分のペースで	わかりやすいレイアウトが	慣れている	行くことに	品数が多い	わかりやすい価格の文字や表示が	ゆつくり見られる商品を手にとり取って	店内が小規模	店内が広く混んでいない	店内が明るい	その他	無回答	合計
個人商店	59	1	2	6			3		2	1	1		2	77
スーパーマーケット	4	10	4	8	8	8	6	11	1	2	2	1	9	66
コンビニエンスストア	5		14	5	7	2	1	8	2	2	1		5	52
デパートメントストア	10		2	2	4					1			3	22
通信販売		13					1						2	16
その他	1											1		2
合計	79	24	22	21	19	12	12	12	11	6	5	3	21	235

自分の目の前に商品を持ってこられることが大きなポイントである。コンビニ店は、店が小規模なのでレイアウトがとてもわかりやすい。また、店員のいる所もわかるので、声をかけやすいことなどがあげられている。デパートは、対面販売が便利な点としてあげられている。特に、お買い物随行サービスに人気があるようだ。

図表5は、「店内を移動する時、不便に感じること」について聞いてみた結果。エレベーターがとびぬけて多く、全回答の5割を占める。「階表示が見にくい」、「ボタンが見にくい」、「階表示のボタンが見にくい」、「誘導表示が見にくい」、「音声がない」が主な不便さの理由である。

エレベーターに乗った後、自分の希望する階で降りるためには、階表示を確認する必要があるが、上部にある表示は小さく、壁にあるボタンの階表示も見にくい。これでは1人で乗ることができないので、「エスカレーターや階段で、階数を数えながら上がる」という工夫をしている人も多い。

健常者に見にくいものは、 弱視者には見えない

今回紹介したもの以外にも、レストラン、家電製品、駅、銀行・郵便局、日用品などについての質問をしている(図表6～8参照)。

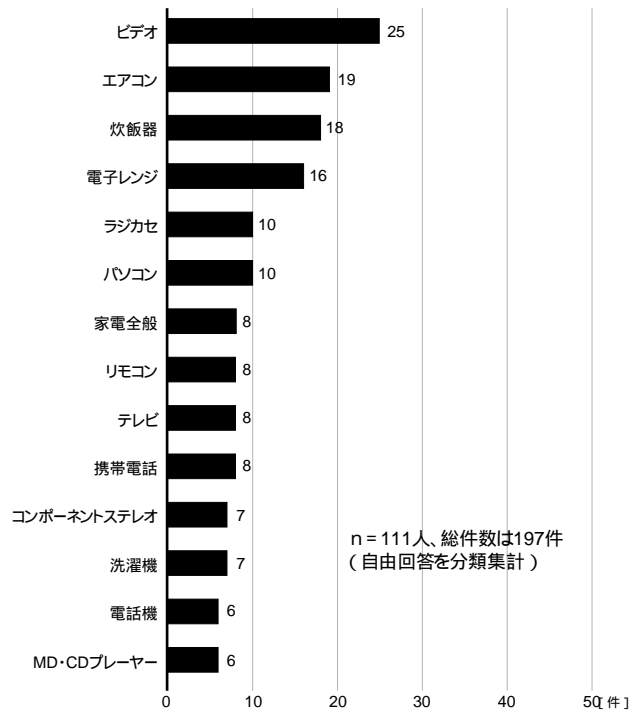
これらの調査結果からわかることは、いずれの場面でも、弱視者の不便さとは「見えにくい」ことから生ずる不便さであり、その多くを健常者も少なからず感じているということ。そして、健常者が少し見にくいと感じるものは、弱視者にとっては区別できないほど見にくいものになってしまうということである。

この調査報告書は1部1000円(税込み、送料別)で販売している。この報告書が、共用品・共用サービスを考えるうえでのヒントになり、多くの人たちに読まれることを期待したい。

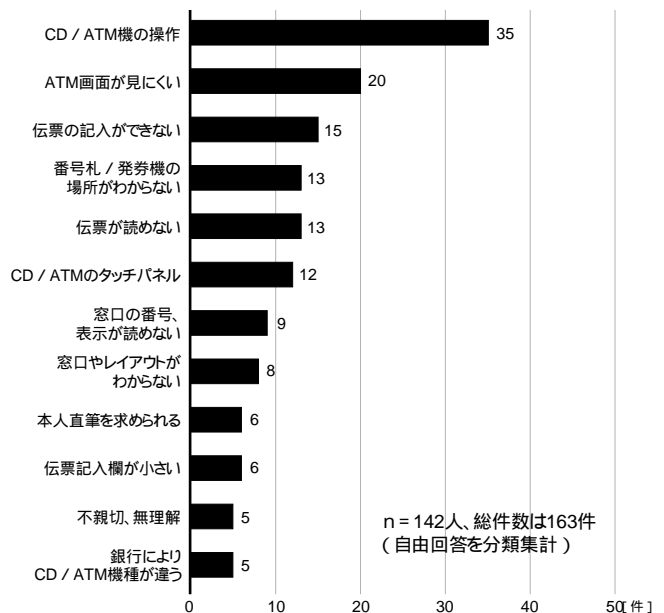
問い合わせ先:(財)共用品推進機構

(TEL03-5280-0020、FAX03-5280-2373)

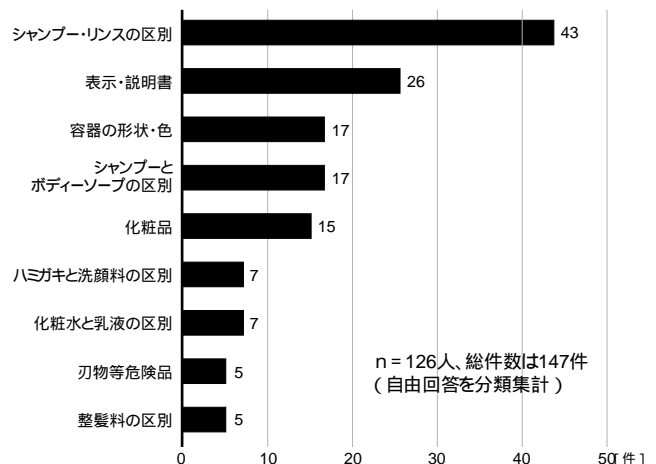
図表6 不便な家電製品[製品別]



図表7 銀行や郵便局で不便に感じること、失敗したこと



図表8 日用品で不便に感じること



共用品推進機構ニュース



法人会員向け報告会を開催 38社、100人が参加して交流

(財)共用品推進機構は2月18日、東京・六本木の国際文化会館で、第1回(平成11年度)法人賛助会員活動報告会を開いた。法人会員に対して、初年度の活動成果と2000年度の計画などを説明するとともに、会員相互の親睦を深めてネットワーク作りを図り、今後の共用品ビジネスの展開に弾みをつけてもらおうというのが主な目的。

当日は38社、約65人の法人会員のほか、鴨志田厚子理事長、相賀昌宏副理事長(小学館社長)、木塚泰弘理事(日本ライトハウス理事長)、小池将文評議員(川崎医療福祉大学教授)、田中徹二評議員(日本点字図書館館長)ら理事・監事、評議員、運営委員、東京会議班長など合計100人近い関係者が出席、相互に交流を深めた。

会ではまず、星川安之専務理事、万代善久常務理事ら機構側による事業活動や東京会議の報告などが行われた。ビデオ『みんなで跳んだ』を上映した後、当日出席した11人の理事、監事、評議員が紹介され、



スピーチする榮久庵憲司さん(上)と大宅映子さん(右)



評議員(評論家)が代表して機構にエールを贈るスピーチを披露。続いて、法人会員38社が順番に一言ずつ挨拶、自社



好評だった富山幹太郎副理事長による講演

での共用品・共用サービスの事業化や開発の状況などを相互に紹介し合った。

最後に、富山幹太郎副理事長(トミー社長)が「企業経営と共用品」と題して講演。トミーでのこれまでの取り組みを振り返りつつ、「息長く続けることが何よりも大事」と継続的なビジネス展開の重要性を訴えた。

この後、会場を移して懇親会が開かれ、出席者同士が名刺交換しながら盛んに情報交換する場面が見られた。ある法人会員は「会議で全員が一言ずつスピーチしたので、どこの企業が来ていて、どんなことをやっているか見当がつき、パーティーでもお互いにすぐに打ち解けることができた」と語っていたほか、事務局には早くも「今後も定期的に情報交換の機会を」との声も寄せられている。

機構の活動報告に熱心に耳を傾ける出席者



まつい さとし 松井智さんを悼む

いつも、みんなのために、
「居場所作り」をしてくれた

ほしかわ やすゆき
星川 安之（(財)共用品推進機構専務理事・事務局長）



在りし日の松井智さん

E&Cプロジェクト聴覚情報障害班の生みの親であり、同班の発足以来、共用品推進機構設立後もずっと班長を務めてこられた松井智さん（筑波技術短期大学デザイン学科助教授）が、45歳の若さで、1月26日午前7時55分、悪性リンパ腫のため亡くなりました。

× × ×

1月16日、日曜日の夕方。私が事務局で仕事をしていると、松井さんから電話がかかった。

「胸が苦しいので、今から筑波に戻り、病院に行く。おそらくそのまま入院ということになると思う」

その後、病院から「やはり、入院するようになった。詳しくはわからないけれど、しばらく入院になりそうなので、その間の事をよろしく」といった電話があった。結局、これが最後の会話となった。

1週間ほどして、奥さまから「精密検査のため、筑波記念病院に移った」と連絡が入り、その4日後の26日早朝、事務局の留守電に「今朝、7時55分、夫が亡くなりました。その間、わずか10日。

病院に駆けつけた時、松井さんを蝕んだ病が彼のあごを大きく腫らせながらも、静かに目は閉じられていた。主治医から「おそらく昨年8月ごろから、鼻の奥にリンパ腫ができ、それがこの短期間で全身に広がり、入院した時にはすでに手の施しようもない状態だった」と説明があった。45歳、あまりにも早すぎる。

お通夜、告別式には、会場に入りきれないほどたくさんの人たちが彼のもとに集まった。彼によく似たお兄さまが、ご遺族を代表して挨拶された。

「弟は、凄い速さで45年という人生を突っ走り、逝ってしまいました。周りのみなさんに慕われた弟でした。そんな弟は、私たちにとって『誇り』です。いつまでも誇りです」

松井さんには一男二女がある。長男の創君は「親父はいつも、自分を信頼してくれて、思うよう行動させてくれた。20歳になったら、親父と酒を飲むのが夢でした。その夢は叶いませんが、父の知り合いのみなさん、20歳になったらお酒を飲みながら、親父の話聞かせて下さい」と健気に話された。

× × ×

松井さんは25年前、金沢美術工芸大学でデザインを学ぶ学生だった時、聴覚障害のある子供たちに言葉を伝える教材を作る仕事に関わった。それがきっかけで、武蔵野美術大学大学院を修了後の80年、神奈川県横浜須賀市にある国立久里浜養護学校の教員の職につくことになった。その後10年以上、重度の障害児のために、昼夜を問わず働いてきた。その間、デザインの能力を活かし、子供たち1人ひとりとコミュニケーションをとりながら、数多くの独創的なおもちゃ、教材を開発した。

恩師からの熱心な要請を受け、聴覚に障害のある学生にデザインを教える日本で唯一の学校、筑波技術短大の助教授として迎えられたのは、91年3月のこと。彼の静かな情熱と湧き出るアイデアは、学生たちを明るく勇気づけ、彼の魂を受け継いだ分身たちは続々と社会に巣立っていった。

松井さんが共用品推進機構の前身、E&Cプロジェクトに参加したのは、それから少し経ってからの頃である。学生たちとの実践教育の中から出てくる提案、アイデアは、社会の中で一番大切なことばかりだったように思う。

彼が中心に行った「聴覚障害者の日常生活における不便さ調査（95年）をきっかけに、E&Cプロジェ

先生が残された花火を、 天高く、打ち上げていきます

まつもり かりん
松森 果林（個人賛助会員）

自分の人生を変えるような出会いというのが誰にでもあると思います。

松井先生との出会いはまさにそれでした。個人的なことですが、昨年8月に結婚式を挙げたとき、松井先生に温かなスピーチをしていただきました。そのお話の中で、先生はいくつかの手話を紹介されました。

「出会う。右手の人差し指と左手の人差し指を合わせて「出会う。人と人が出会う。出会う……。」

松井先生はそんな出合いをととても大切にされる方でした。先生に出会い、先生の温かさ、やさしさ、誠実さ、ユーモア、しなやかな感性、豊かな発想力、そして、自分にも、他人にも、仕事にも、いつも一生懸命で、完璧な先生の魅力にひかれ、先生のアドバイスに導かれた方はたくさんいらっしゃると思います。

いつでしたが、松井先生が「自分が60歳になったとき、教え子と一緒に仕事をしている仲間、そして家族に囲まれて、幸せな定年退職をするのが夢だ」とおっしゃっていました。

今でも信じられません。大学の研究室に行けば、パソコンに向かう先生の姿が見えるような気がします。自分が今、どうしてこんな所において、昨日から一体何をして

いるのか、まるで夢の中の出来事のように。ここに居る時間はとても長く、そして寒くて悲しいです。

自分が迷っているとき、「前へ、前へ！」といつも背中を押してくれました。先生のお知り合いの方がこんなにたくさんいて、つい、先生の姿を探してしまいます。今のこの状況を手話で説明してくれる先生がここにいないのが、とても悲しいです。

今年の先生からの年賀状で「今年は何発あがるか、打ち上げ花火!!」とありました。先生ご自身で、お仕事でも、プライベートでも、いろいろな計画をたてられていたのでしょうか。残された花火がたくさんたくさんあります。それらに1つでも多く火をつけて打ち上げるのが、残された私たちにできることだと思います。

先生がご尽力されていた聴覚障害者のバリアフリー活動の意思を受け継いで、天にいる先生にも見えるくらいに、高く、大きく、花火を打ち上げられるよう、みんなで力を合わせて頑張っていくことを約束したいと思います。

松井先生、いままでの分も、どうぞ安らかに。そして、いつも側にいて、花火が上がるのを見守っていて下さい。

筑波技術短期大学デザイン学科第4期生^{くらしま}・倉嶋果林

（松井智さんの教え子で、聴覚情報障害者のメンバーである松森〔旧姓倉嶋〕果林さんがご葬儀で読まれた弔辞を掲載させていただきました。松井さんのご冥福を心からお祈りいたします）

クト内に「聴覚障害班」が誕生した。もちろん、松井さんが提案したものである。

彼が監修を担当した『“音”を見たことありますか?』(E&Cプロジェクト編、小学館、97年)では、困難とされていた「聞こえない人の疑似体験」を、マンガのセリフや擬音の文字を赤字で印刷し、そこに赤い透明シートを被せて読むと、そこだけ消える、という秀逸なアイデアで実現した。最近では、世の中にある音を集めて『音見本 生活の音ガイドブック』(本誌第2号の松井さんの寄稿を参照)を作り、これを使って、耳の不自由な人たちに必要な音を調査する準備を進めていた矢先だった。

× × ×

松井さんと初めて会ったのは、今から20年ほど前、場所は久里浜養護学校。それ以来、特に彼がE&Cプロジェクトに入ってから、ほぼ毎日のように、電話やメールでやりとりをしていた。

松井さんは、自分以外の人、教え子たち、友人、同僚、仲間、家族、そして社会のために、いつも時間を割き、ただの1回も愚痴ることなく、笑顔で、一生懸命、働いていた。彼が一貫して行ってきたことは「人々の居場所作り」ではなかったかと思う。彼の作った「居場所」に、私自身も含めて、なんと多くの人たちが今いることが……。

彼が今、目に見える形で存在しないということ、私はいまだに受け入れられないでいる。1月8日の東京会議・班長会議で、「4月に行う報告会はパネル報告にしてはどうか」と提案したのは、入院する直前の松井さんである。彼が提案した形で行われるであろう、4月22日の共用品推進機構東京会議・初年度報告会。彼は、いつものように扉を開けて、いつもの席に座り、おもむろに司会を始める、あのユーモラスで温かい独特のスタイルで……そう思えてならない。

寄稿 今すぐできる 「フロッピー版書籍」の作り方(上)

作成方法と工夫のポイント

やだ ぐろう としぶんかしや
屋田 悟郎 (都市文化社編集部)

私たち都市文化社では、昨年8月に共用品推進機構の個人賛助会員、芳賀優子さんのエッセイ集『弱視OL奮戦記』を出版した。その際に同時発売した視覚障害者向けのフロッピーディスク(FD)版について、その作成方法並びに販促・販売方法について、2回に分けてご説明したい。

このFD版は、パソコンの音声化ソフトや点訳ソフト、専用の読み上げ機などを通じて読んでいただくことを想定して販売したものだが、幸いなことに大変好評で、多くの視覚障害者の皆さまからご注文をいただいた。その多くは、もしFD版がなければおそらく本書を購入してはもらえなかった方々と思われるので、この試みは私たち出版社としても大変有益であったと考えている。

FD版の作成自体は、以下に説明するとおり、少なくともDTP(デスク・トップ・パブリッシング)を採用している出版社にとっては非常に容易である。したがって、今回の私たちの経験を他の出版社の皆さまにも知っていただくことで、今後1冊でも多くの「FD版書籍」が作成され、視覚障害者の皆さまのお役に立てれば、と考えている。

<音声化のチェックポイントは「改行」>

パソコンの音声化ソフトや点訳ソフト、視覚障害者専用の読み上げ機を利用するためには、まずウィンドウズ・マシン用にフォーマットしたフロッピーディスクを用意し、それにテキストデータ形式(.TXT拡張子)で文章を保存する必要がある。これならば、ほとんどのパソコンや読み上げ専用機で使用できるはずである(今回はそれ以外のフォーマットはコストや手間の問題から用意しなかった。これは今後の課題である)。

弊社の場合、このFD版の作成自体は、編集作業のほとんどすべてをコンピューター化、つまりDTP

化しているため、比較的簡単に行えた。編集の最終段階まで文章をデジタルデータとして扱うDTPでは、完成校の本文をテキストデータとして取り出すことはきわめて容易である。逆に、従来の写植による版下作成を行っている場合は、本文のテキストデータ化がきわめて煩雑になるので、事実上、FD版の作成は難しくなるかと思われる。

本文をテキストデータに変換したら、今度はそれを音声化ソフトで実際に聞いてみて、音声化がスムーズに行われるかどうかをチェックする必要がある。最近の音声化ソフトは驚くほど高性能化していて、読み上げはかなり正確である。したがって、テキストデータさえ取り出せれば、本文自体はほとんど修正する必要はないと思われる。

ただし、以下のようないくつかの問題は生じた。主なものを列挙してみる。

- ・改行が崩れる
- ・人名など特殊な読みの場合、読みがおかしくなる
- ・特殊記号や外字などが読まれない
- ・見出しと章の文頭、文末と次の章の見出しとの間など、空欄の改行数がバラバラになる
- ・写真や図表などの扱い

この中で一番深刻なのは、改行の問題である。特に、熟語の途中で改行が入ってしまい、うまく読み上げずに、聞いていて意味が読み取れない箇所が出てしまうのが問題になった。正直に言ってしまうと、この解決は実のところ厄介で、私たちがDTPに使用しているマッキントッシュ・パソコンの編集専用ソフトから、ウィンドウズ・パソコンの編集ソフト(例えば「ワード」など)にデータを移す際、どう試しても改行の乱れが起こってしまう。

大変お恥ずかしい話ではあるが、今のところ弊社ではこの問題を解決することができておらず、改行が乱れたままのデータを提供している。この問題の

解決方法をご存知の方がいらっしゃれば、すぐにも教えていただきたいと思う。

他の問題については、人名などはなるべくひらがなにひらくことで対応した。特殊記号や外字などは、できる範囲で（文意を崩さない程度に）変更していった。空欄の改行数などは、一応1行なら1行と揃えた。しかしこれは、ソフトの設定によっては改行記号を飛ばして読んでしまうため、あまりこだわらなくてもよいようである。

また、本書の場合、エッセイの内容に応じてマンガ風のイラストを使用している部分もあったが、あえてイラストの説明文などは付けなかった。エッセイということもあり、イラストの説明は蛇足になると判断してのことだが、本文を読み解くうえで重要な「図表」などがある場合は、文中の括弧などで図表の説明文を挿入する方法もあり得るであろう。

<目次から本文にジャンプ!>

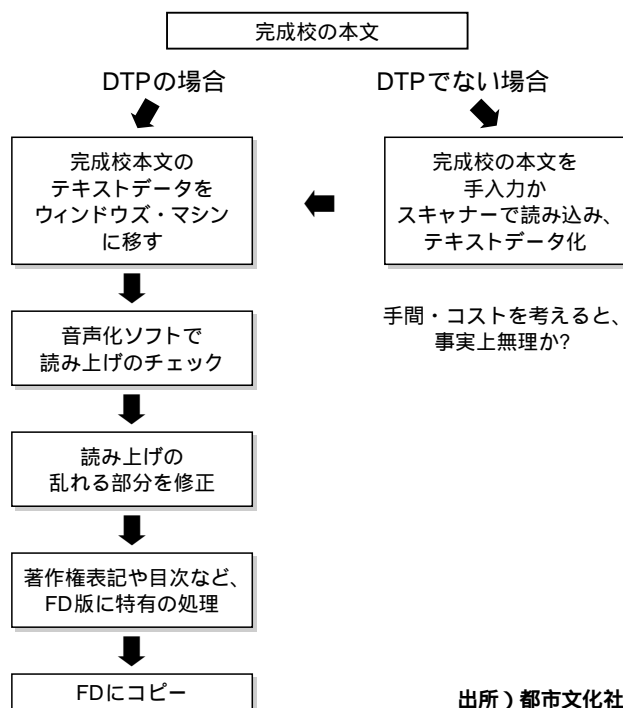
また、このほかに、音声化ソフトでの使用を考慮していくつかの工夫をした。

- ・データの冒頭部分で、本書のタイトル、著者名、著作権に関する表記、コピーの禁止、FD版特有の改変などについて述べた
- ・それに続いて、本文データの構成（最初に目次があって、それ以下に全章が順番に配置されている旨）を述べた
- ・目次は各章の見出しを並べ、キーワード検索機能を使うことで、その章までジャンプできるようにした

これらの工夫は、基本的には音声化ソフトの利用者がデータの冒頭から順番にしか読み進めることができない（本のように飛ばしながら内容を把握しにくい）という点を考慮してのものである。見出しの工夫は、ノンブルがなくても目次として活用できるようにとの考えからである。

この程度の工夫ならば、ほとんど手間もかからず行える。もちろん、ほかにもいろいろと工夫の余地はあるだろう。ただ、少なくともこれまでにFDの内容や使い勝手に関する苦情は1件も寄せられていない。いかに手間をかけずに作成するかは、この

図 FD版書籍作成の流れ



FD版をできるだけ安価に提供したいという考えと密接に関連している。私たちは、このFD版を原則的には「ゼロ円」で提供したいと考えているので、いかに低コストで作成するかは非常に重要なテーマだった（「ゼロ円」とは、FD版に「上乘せ」の料金はとらないという意味である。活字版の本と同じ料金は当然いただいている）。

さて、最後は、このようにして完成させたFD版本文のテキストデータを、パソコン内のハードディスクからFDにコピーしていけばよいだけである。作業時間は1枚あたり10秒程度であろうか。

FD版の作成方法については以上のとおり、非常に簡単な作業である。その気になれば1日で全作業が終了するはずである。

しかしながら、実をいうと問題はむしろこの後なのである。つまり、このFD版を作成したことを、どうやって視覚障害者の皆さまに告知し、販売するかということのほうが、FD版の作成自体よりも、はるかに難しい問題である。FD版の販売方法・販促方法については、次号で詳述する。また、著作権の問題など、FD版に特有の問題についても、私たちがいろいろと考えたことを述べてみたい。

問い合わせ先：都市文化社編集部

(TEL03-3268-6031、FAX03-3268-6032)

● ニュース&トピックス

経営・新製品・新サービス・新技術・イベント

「見えない・見にくい人の便利グッズサロン」

(株)大活字、東京・水道橋に開設

視覚障害者や高齢者にも読みやすい大きな活字の書籍を出版している大活字(市橋正光社長)は2月26日に、東京・水道橋に「見えない・見にくい人の便利グッズサロン」をオープンした。昨年刊行した『見えない・見にくい人の便利グッズカタログ』(弱視問題研究会編)に収録した商品を実際に手にとって試すことができる展示室で、弱視のスタッフが使い方の説明や相談にあたるほか、一部の製品については販売も行う。

サロンの開設場所は、千代田区三崎町1-1-9の祥伝社三崎町ビル3階にある同社内。開設するのは、毎月第1・第3水曜日、第2・第4土曜日の4日間で、

いずれも午前10時～午後4時。

『便利グッズカタログ』の共同執筆者で、自身も弱視の増田由季子さんをチーフに、常時2人が説明や相談にあたる。展示するのは、拡大読書器から、電磁調理器、糸通し器まで約50点。同サロンでは、「こんな商品があったら便利」「こういう使い方もできる」といった意見やアイデアを話し合える「弱視者同士が気がねなく情報交換できる場づくり」をめざしている。近くホームページも開設する予定で、ネット通販をスタートする準備も進めている。

問い合わせ先：(株)大活字

(TEL03-5282-4361、FAX03-5282-4362)

足のむくみ、痛みを和らげる圧迫ストッキング「ジョブスト」テルモが一般向けに発売

テルモは、下肢静脈瘤の症状の1つである血管の浮き上がりや、長時間の立ち仕事や運動不足などからくる足のむくみ・痛みを和らげるメディカルサポートストッキング「ジョブスト」を発売した。

同社によると、病院では下肢静脈瘤のある患者に対して、圧迫ストッキングを着用することで静脈のうっ血を防ぐ「圧迫療法」が行われている。「ジョ

ブスト」はそうした医家向け製品の技術を応用したもので、全国の薬局、ドラッグストアなどで販売している。

希望小売価格は、パンスタイプが3700円、膝下タイプが2500円。

問い合わせ先：テルモ(株)

お客様相談室 (TEL03-3374-8138)



創刊1周年記念号(第6号)のご案内

新製品・サービスをワイド特集!
「米国バリアフリー・レポート」もスタート

『インクル』は5月15日発行予定の次号で、創刊1周年を迎えます。そこで、増ページを断行したうえで、共用品・共用サービスの新製品をワイド特集形式で満載します。さらに、共用品の市場規模調査の速報なども掲載する予定です。

連載企画も充実。「シリーズ・Kyoyo人」では(財)共

用品推進機構評議員の長島純之ながしまのりゆきさんを紹介するほか、好評の「キーワードで考える共用品講座」では同講座の活用実例を取り上げます。そして、新連載「米国バリアフリー・レポート」(仮題)がスタートします。元朝日イブニングニュース記者で、現在サンフランシスコに留学して障害者カウンセリングを学んでいる草地美穂子くさちみほこさんが、自ら聴覚障害者として体験したことも含めて、「福祉先進地」といわれるカリフォルニア州の最新事情を報告します。

2年目を迎える『インクル』に、ご期待ください。

「共用品の類型」

ごとう よしかず
後藤 芳一（個人賛助会員、日本福祉大学兼任講師）

「共用品」には多くの手法と品目がある。通産省の「福祉用具産業懇談会」が1995年度分から市場規模を公表し、(財)共用品推進機構はその根拠となる共用品の類型化を行ってきた。逐次見直しを加えながら、現在は以下のようにになっている（小さな添え字は、同様の用語が『インクル』第2～4号の本欄に既出であることを示す）。

1. 「由来と属性」による類型

共用品は福祉用具を一般に利用できるようにしたもの、一般製品を共用化したもの、当初から共用をめざして設計されたもの、に3分される。

製品の由来と性格でさらに細分すると6段階に分けられ、「専用福祉用具（ ）」（高齢者や障害者専用の「福祉用具」）、「共用福祉用具（ ）」（意図的な工夫はないが一般にも利用できる福祉用具）、「共用設計製品（ ）」（福祉用具をもとに一般に普及するように再設計した製品と、当初から共用をめざして設計された製品）、「バリア解消製品（ ）」（一般製品をもとにバリアを除いて共用化）、「ユースフル製品（ ）」（意図的な工夫はないが高齢者や障害者に使いやすい一般製品）、「健常者専用品（ ）」（一般製品のうち健常者の専用品）となる。

冒頭に記した「共用品の市場規模」は、上の～を合計している。97年度（以下同じ）の市場規模約1兆1000億円の内訳は、 が約9000億円、 が約2000億円、 はわずかである。

2. 「商品分類」による類型

商品分類からは8つの分野に分けられる。

市場規模とともに示すと、「食料品」（2068億円）、「一般機械」（3448億円）、「電気機械」（4350億円）、「輸送用機器」（103億円）、「精密機器」（2億円）、「化学製品」（121億円）、「住宅設備」（1033億円）、「その他」（140億円）となる。また、「金属製品」を一般機械に含めず、9つに分類する場合も

ある。

3. 「使いやすさの要素項目」による類型

「使いやすさの要素項目」からは7つに分けられる。特にその要素項目が必要な「障害種別」との対応は、次のとおりとなる（カッコ内は障害種別を略記）。

- 「製品所在の認知性」（視覚、高齢）
- 「アプローチやアクセスの容易性」（肢体、高齢）
- 「識別の容易性（商品情報）」（視覚、高齢）
- 「識別の容易性（操作情報）」（視覚、聴覚、高齢）
- 「操作の容易性」（視覚、聴覚、肢体、高齢）
- 「取扱方法情報提供」（視覚、聴覚、高齢）
- 「保守・管理の容易性」（視覚、聴覚、肢体、高齢）

他に、共用品推進機構『共用品展示リスト』（99年）では、製品ごとの利用者を視覚、聴覚、下肢、上肢、高齢者、妊産婦、左利きに7区分している。

4. 代表的な商品と類型との対応

代表的な共用品と上の類型を対応づけると、次のようになる（カッコ内は順に、1.～3.の類型に対応する）。

- 「シャンプー容器」（、化学製品、と）
- 「音声表示機能付きエレベーター」（、一般機械、と）
- 「車いす対応自動販売機」（、一般機械、）
- 「駅のホーム用自動ドア」（、一般機械、と）
- 「温水洗浄便座」（、一般機械、と）
- 「点字表示等がある家電製品」（、電気機械、）
- 「点字や音声の取扱説明書付き家電製品」（、電気機械、）
- 「助手席等がシフトする乗用車」（、輸送用機器、）
- 「低床バス」（、輸送用機器、）
- 「操作部に凸表示のある玩具」（、その他、と）
- 「見やすく大きい活字の書籍」（、その他、）
- 「触地図」（、その他、と）

もっともっと、 たくさんの人たちと語り合いたい。 『インクル』からのお願いです。

『インクル』は(財)共用品推進機構の機関誌です！

世界で唯一の共用品情報誌『インクル』は(財)共用品推進機構が隔月刊で発行し、個人・法人賛助会員の皆様に郵送でお届けしています。機構では、共用品・共用サービスの普及とバリアフリー社会の実現に共に取り組んでくださる個人・法人賛助会員を募集しています。年会費は、個人が1人1万2000円、法人が1口20万円。入会申し込み・お問い合わせは、下記の事務局までお願いいたします。

『インクル』は共用品・共用サービスの専門情報誌です！

企業や団体などからのニュース提供をお待ちしています。新製品の発売、新サービスの提供開始、新技術の開発、展示会やイベントの開催、常設展示場の開設 共用品・共用サービスに関するニュースリリース、カタログ、パンフレット、広報誌などの資料をお寄せください。ご連絡は、事務局『インクル』編集部までお願いいたします。

また、広告の出稿もお待ちしています。『インクル』の読者は共用品・共用サービスの普及を担うオピニオン・リーダーです。出広媒体としても積極的にご活用ください。広告料金表は事務局にご用意していますので、お問い合わせください。

『インクル』は消費者と企業をつなぐ架け橋です！

個人からの寄稿・投稿も大歓迎。「バリアフリーサービスの素敵なお店」「心のバリアフリー体験談」「海外ユニバーサルデザイン事情」などなど、個人賛助会員の皆様はもとより、法人賛助会員の読者の方々からのご意見もお待ちしています。宛先は事務局『インクル』編集部まで。お手紙やおはがきのほか、FAXや電子メールでも結構です。

作る人と使う人の共用品情報誌

インクル 第5号

2000(平成12)年3月15日発行

"Incl." vol.2 no.5

©The Kyoyo-Hin Foundation, 2000

隔月刊、奇数月に発行

頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

視覚障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構

郵便番号101-0064

東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル8F

電話：03-5280-0020

ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子

事務局 星川 安之

森川 美和

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 小塚 通宏

(五十音順) 後藤 芳一

杉山 雅章

牧内 智子

松森 果林

屋田 悟郎

山本 明彦

制作 日経BPクリエイティブ

印刷・製本 光写真印刷株

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。